
遺志と意志

時呉夾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遺志と意志

【Nコード】
N9514F

【作者名】
時呉夾

【あらすじ】
半人半霊の少女は悩んでいた。自らの振るう剣に。それを見た主人はある一つの話を持ちかける。

（前書き）

この小説は、自分の中で創られた妄想の世界です。自分の価値観に合いそうもない、そう思いの方は今の内にお戻りください。

あくまで自分の考えですので、そこを批判することだけはお止め下さい。

では、ごゆっくりどうぞ。

「っきゃあー」

叫び声と共に少女が地面へと倒れ込み、木刀が少女の手を離れて

カラン

と、音を立てた。

そして、少女を倒した当の老人は、自身の白髭を触りながら、少女へと渴を入れる。

「妖夢よ、お主は儂を倒す気はあるのか」

「あ、あります！」

妖夢と呼ばれた少女は、その言葉に強く反応して言った。

その言葉を聞いて、老人は首を振った。

「ならば何故、お主の業は上達せぬのだ。こうもやってきて上手くいかないとなると、お主の心が怠けているようにしか儂には思えないのだ」

「そ、そんなことはありません！」

妖夢が慌てて反論するも、言った当の本人は後ろを向き、何かを考えているようだった。

と、老人がふいに顔を上げ穏やかな声で尋ねた。

「ちよつと良いかな？」

その声の変化に妖夢は驚き、ただ必死に頷く。

「妖夢、お主は何故刀を持つ？刀は弓矢に比べて速度で劣り、間合いで劣る。ならば何故刀を持つ？」

「えっえつと…あの…一番向いていると思ったからで…」

「ふん、では何故お主はその刀を振るうのだ？お主が振るうその刀は簡単に人の命を奪い去る。それなのに何故お主はその刀を振るう？」

「それは…いずれ庭番としてのお役目を継ぎ、幽々子様のお身体を守ることにこの刀を振ります」

「…そうか…」

そう呟く老じ

「避ける！妖夢！！」

そうして老人の腕に強く押し飛ばされる少女。

そして、彼女の視線に広がる、師の背中に突き進む無数の矢、矢、矢矢矢…。

「いやーー」

「いやーー…っあっ？」

その視線に広がるは、彼女自身の寝室、半霊、そして朝日…。

「ゆ、夢…？」

ふう、とため息を洩らす。

しかし、夢であると分かっているにもかかわらず彼女の心にはただ、寂しさ……。

「師匠、今何処にいるのですか……。」

その日も魂魄妖夢は、いつものように鍛錬をおこなっていた。

シュッ

シャッ

カチッ

三つの音が連続して聞こえ、目の前にある竹が斜めに四本滑り落ちる。

（師よ、私は今も悩んでいるのです。私は一体どうすれ……………）

パチパチパチ……

「いや、流石は妖夢ね。これだったら西行時の主人としても安心ね」

我に帰り、声のしたほうへと体を向けると、そこには庭先でこちらに向かって手をたく一人の女性、この白玉楼の主にして幽霊である西行時幽々子の姿があった。

その姿を見て、妖夢は困ったような笑みを浮かべた。

「私の腕なんてまだまだですよ。先代に比べたら」

「でも、今は妖忌はいない。そして貴女がいる、そうでしょ？」

ね？そう言って幽々子は笑った。

それにつられるかのように笑った妖夢ではあったが、その瞳があまり笑っていないことに幽々子は気づいた。

(この話をする時はいつもそうね)

「それよりも妖夢、私お腹が空いたわ」

「あっはい。それでは直ぐに支度しますね」

そういつて慌てて片付けを始める妖夢の後ろ姿を、何かを考えるようにして幽々子は見つめていた。

「ごちそうさまでした」

「もう、朝っぱらからご飯を六杯も食べる女性がどこにいますか…」

「ここに」

「……はい……」

やれやれ、と片付けを始めた妖夢に幽々子が声をかける。

「妖夢、ちよつと良い？」

「…？何でしょうか？」

妖夢が片付けの手を止め、幽々子の方を向く。

「実は今晚紫が遊びに来るんだけど、それでね、珍しい物を探してきてくれないかしら？」

「珍しい物……ですか？」

妖夢が首を傾げる。

「そう、紫ってなんでも知っているじゃない？だから今度こそ彼女を「凄い！」って驚かせてみたいのよ。…やってくれるかしら？」
「…やってみます…」

そして妖夢は行く。宴の肴を探しに……………。

（……とはいったものの、珍しい物とは一体……………）
当てもなく人里へとおりてきてみた妖夢であつたが、そこにはやはり普段から置かれている物しかなく、村人にも聞いてみたが思うような情報を得ることが出来ない。

（一体どこにあるのだろ…ん、あれは？）

妖夢は何かに気づき、そちらに向かって歩き出す。
そして目標の近くまで行ったところで相手も気づいた。

「おや、妖夢ではないか。どうしたんだ、こんな人里まで」

「どうも慧音殿。お久しぶりです。」

妖夢がみつけたのは、この村で教師をしている半人半獣の上白沢慧音であった。

歴史をよく知る慧音ならば、珍しい物も知っていると考えたのだ。「妖夢、どうか殿なんてつけずに慧音とだけ呼んでくれ、とそう言っているではないか。…まあ、それはいいとして、なにがあったんだ？」

慧音が苦笑しながら妖夢を促した。

「あ、はい。実は……」

〈少女説明中〉

「……という訳なんです」

「はあ、お前さんも苦労してるんだな。…しかしながら、すまないが今そういう当てはな…ん、そうだ」

「…？」

「妖夢、永遠亭に行ってみたらどうだ？」

「永遠亭…ですか？」

妖夢は首を傾げた。永遠亭には永夜事変の際に数回行ったが、あそここの面々の殆どには正直良い思い出がなかった。

そんな妖夢の表情を読み取ってか、慧音は笑って付け足した。

「永遠亭の者達は月から来ているからな。色々と情報も手にはいることだろう。それに、待っている人もいるんだらう？」

慧音の言うことには、一つ一つに確かな理由があった。

妖夢は慧音にお礼を言い、永遠亭へと向けて歩き出した。

永遠亭の中に入ると、運の良いことに不老不死の薬師、八意永琳を見つけることが出来た。

後ろから妖夢が声をかけると、永琳は驚きこちらを向いた。

「あれ？ああ、妖夢さんではないですか。一体どうしてこんな場所まで？あ、もしかしてこの前お願いしたモニターの件で引き受けに来てくれたんですか？」

「あ、いえ。そういう訳ではなく、今回は相談事がございまして……」

～再度少女説明中～

「……という訳なんです……」

「ふん、そういうこと……」

妖夢の説明に永琳は考え込んでしまう。

（ここでも駄目なのか……）

そう思い、気を落とす妖夢ではあったが、

「……良いわ、丁度あるのよ、貴女が探してるような物が。まあ、少しくらいだったら、ね」

永琳からの返事は、予想を良い意味で裏切ってくれた。

「本当ですか!？」

妖夢の驚き声に永琳は頷いた。

「ただし」

「ただし？」

雰囲気が変わったのを肌で感じながら妖夢はオウム返しする。

「私に勝つことが出来たら、ね？」

「……望む所です！」

妖夢が刀を抜き、脇構えに構える。
そして言う。

「この刀に斬れぬものはあんまり無い！」

「そう？それじゃあ私を斬ることなんて出来るのかしら？」

そして

戦いが始まった

「くっ、っ、強い……」

妖夢は苦戦していた。

永琳の放つ矢によって、刀の間合いに入ることが出来なかった。
「……これが現実よ。いくら速く刀を振ろうとも、所詮は刀。矢の速度に勝つことなんて出来ないのよ」

そう言って永琳は笑う、冷たく。

「手は抜かないわよ。私が勝ったら貴女は私の大切なモルモット。半人半霊なんて滅多にお目にかかれない貴重な種族なんだから」

「誰がモルモットにな、くっ、なるものか」

妖夢は必死に反論するものの、その姿は傷で覆われ、服は無惨にも破れてしまっていた。

「そんなあられもない姿で言われてもなにも感じないわよ。……まあいいわ、これで楽にしてあげるから」

そう言って永琳は銀色の矢を一本取り出した。

「これは、貴女達がここに来た後に貴女達の為に作り上げた矢よ。これが当たれば霊体は機能を停止せざるをえなくなる……そうよね

「？」

「……………」

肯定の証だった。

「それじゃあ、暫くはサヨナラ」

……………手を……………

……………離した……………

その瞬間から動きが止まっ

否、違う…

ゆっくりと動いていく……

体を動かすことは出来ないのに

意識だけはこうして保ったまま……

私は今まで何の為に様々な相手と斬り結んできたのだろうか

何故…

何故…

幽々子様の為？

違う…… そんなんじゃない……

だったら何？

私は何の為に…

そうか

そうなのか

私はただ…

ただ斬りたかったんだ

私が

私という存在であるがために……

時間が戻る。

矢が迫っていたがもう怖くなかった。

刀を抜く。

閉まった。

その次の瞬間、矢が二つに裂けて地面へと落ちていった。

それを見て、永琳の顔色が変わった。続けざまに矢を放つものの、どれも同様にして地面へと散った。

「貴女、一体……一体何をしたんですか……？」

少女は答えなかった。

ただただ考えていた。

あの日のことを。

今なら答えられた。

一、私は何故刀を持つのか……

それは、刀が如何なる動作にも応じ攻めへと転じることが出来る故

一、私は何故刀を振るのか……

それは、私が刀を愛しているから。

私自身がそれを選び、そうであることを望んだから。
私であるが為に

「こっちからも行かせてもらいますよ」

この戦いが始まってから初めて妖夢が攻めに転じた。

そして、それは異常な速さで永琳へと近づいていった。

「ふう、仕方がないですね」

永琳は、残った力の殆どを使い、強固な障壁をつく

「無駄です。今の私に斬れぬものなど微塵も……………無い」

「えっ…………？」

斬った、障壁ごと。

斬られた、私が。

静かだった。刀が閉まる澄んだ音が響き渡った。

そして、倒れて動かない永琳を、妖夢は荒い息で見つめていた。
見つめていないと立っている力が全て抜けてしまいそうで、堪えていた物が溢れ出てきてしまいそうで

『今のは……まあまあ速かったな……』

「師匠!？」

頭に手を添えられた…気がして後ろを振り返ってみると、そこには何もなかった。

いや、いるはずがなかった。

「いやゝ私の負けねえ」

「きやつ」

後ろから突然声をかけられ、妖夢は文字通り飛び上がってしまった。それを見て永琳が呆れ声をだす。

「貴女…仮にも勝者なんだからシャキツとしなさいな」

「あっはい…すみません…」

妖夢は、恥ずかしいやら落ち込んでいるやらで動転してしまい、表情と顔色がめまぐるしく変わっていく。

「…まあいいわ、ついてきなさい。美味しい食べ方教えてあげるから」

「あっはい、お願いします」

そして二人は館の中へと消えていった。

「妖忌、貴方はどれだけ経っても変わらないわね」

縁側に腰掛けながら幽々子は言った。

どういうことだ、そう妖忌が不機嫌そうに呟いた。

「そのままの意味よ。貴方は、口ではどんな事を言ってもまずあの子の事を心配する。あの子に危険な事をさせるつもりつもりなんて全く無いじゃないの」

幽々子は笑いながらもそう続け、反対に妖忌は深い溜め息をついた。

「儂は、あの子に自

分と同じような道を歩ませたくないだけなんだ。たとえあの子が望まなかったとしても」

「？」

幽々子が首を傾げる。

「あの子には、儂のようにその一振りで相手の魂をも斬る、そんな暗の剣にはなつて欲しくはないんだ。そうではなく、相手と斬り合う、それによって迷いを断ち、その人生に新たな道をもたらす光の

剣とでもいおうか、そんな庭師になって欲しいのだ」

「妖忌……」

「それが、儂が師として、保護者として思っただひとつのことだ」
そう言っただけ妖忌は笑った。自分自身に対して……。自身の背負った罪を少しでも償おうとするかのように。

そんな彼に、幽々子はポツリと言った。

「ズルいわ……」

「えっ？」

「貴方ばかりが悪い目にあって私はこうして悠々とすごしている」
「そういう訳ではございませんでし」

「またそうやって言う。そうやって……そうやって!」

幽々子は、妖忌を後ろから強く、強く抱きしめた。

「幽々子様？」

困惑する妖忌に構わず、幽々子は叫んだ。

「今は……今だけは貴方の為にこうしていさせて……」
そうして幽々子は彼の背中で静かに、静かに泣いた。
妖忌は、そんな彼女の頭を優しく撫で続けた。

「さて、儂はそろそろここを去るとしましょうか」

「ごめんなさいね、引き留めてしまって」

「いえいえ、これも元ではあります但し庭師の仕事ですので。……幽々子様、涙を拭いて笑ってあの子を迎えてあげて下さい。そして、これからあの子を頼みます」

そして返事を待つことなく、妖忌は旅へと戻っていった。
いつも変わらない別れ、しかし、別れる時の気持ちはいつもとは違った。

「駄目ね、私……すっかりして、妖夢が帰って来ちゃうわ」
自分自身を叱り、幽々子は屋敷に戻っていった。

夕日を背にしながら、妖夢は帰ってきた。手に、大きな包みを抱いて。

幽々子はその姿を見て、優しく微笑んと言った。

「お帰りなさい、妖夢」

「ただいま戻りました、幽々子様」

幼き従者も笑って言った。

宴は続いていた。妖夢は、幽々子にせがまれて、先程手に入れた料理をテーブルに置いた。

見た感じ、何らかの唐揚げのようだった。

早速口に運ぶ紫。その表情が変わった。

「妖夢、これはどこで手に入れたの？…ああ、そうじゃなくって本当に懐かしい味だったから、ね？」

紫が笑い、妖夢の頬が少し朱に染まった。唐揚げを頬張りながら、橙が聞いた。

「ねえ紫様、この美味しいお肉は何ていうの？」

「これは、幻想郷にはいない鯨っていう生き物よ」

そうなんだ、橙はそう言ってまた、唐揚げにかじりつく。その姿を見て、またみんなが笑った。

食事も一段落し、妖夢と藍は台所で食器を片づけていた。

「それにしても、幽々子様も紫様も本当によく食べますね」

「まあ、主達にとつて数少ない楽しみの一つであるからな」

そこで藍は言葉を切つて続けた。

「妖夢、何かあつた時には主達に話して見るといい。何か得ることが出来るはずだ。なんでも抱えていてはいけないぞ」

「そうよ」

スキマから紫も出てきて言った。

「貴女は貴女の道を行けばいいのよ。彼の道を真似てみたつて駄目よ。そんな事したつて彼は、妖忌は喜ばないわ……ね？」

「……………はい……………」

妖夢は、力強く頷いた。

そう

私は私であつて私でしかないんだから

私は庭師、半人半霊の庭師。そして、一人の剣士。

私が自分で選び、背負っていく称号。

これが私の意志

師の遺志から得た私だけの意志……。

了

（後書き）

いかがだったでしょうか、今回の話は？

あくまでも自分の主観ではなしです。この意見に共感出来る人もいれば出来ない人もいる。それはそうです。

そして、自分の中での妖夢や妖忌は不器用な人間なのです。相手の事を考えすぎてしまうが故に自分を出せない人、それは日常にかくれたものです。

そんな事を考えて作ってみました。気に入ってもらえたら嬉しいです。どうも、ここまで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9514f/>

遺志と意志

2011年1月6日02時31分発行